

生存科学研究ニュース

VOL. 10. NO. 2.

1995. 3. 10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

電話 03-3563-3518

別府子ども学フォーラム 「子どもは未来である」

平成7年1月14日(土)午後1時30分より5時まで、別府市と生存科学研究所との主催により大分県別府市杉乃井ホテルにおいて標記のフォーラムが開催された。

これは生存科学研究所が、3年前から実践的地域研究として進めてきた、九州プロジェクトの一環である別府市将来計画の総合的調査研究の中の主要テーマの一つ、将来を担う「子ども」への取り組みを通し、未来の生存を考え、地域住民と医師会はじめ保健・医療関係者等、地域行政が一体となって生存基盤の確立に向け実践活動を盛り上げるための基礎がためでもあり、また、そのスタートの烽火でもある。大会場を埋めつくした2400人もの聴衆は最後まで熱心に聞きいていた。

冒頭挨拶に立った中村太郎・別府市市長は「子ども学」は小林登・国立小児病院院長(生存科学研究所副理事長)が10年前に初めて使った言葉であるが、今日をきっかけに別府市から日本全国に子どもの情報を発信したい、現代社会の問題は環境問題にしろ人権問題にしろすべて大人の社会の

問題である、大人が解決に困難を感じていることに子どもからその解決を教えられるのではないかと考える、今まで子どもを尊重し、子どもから教えられる子育てができていなかったのではないかと反省させられる、子どもを尊重し、子どもから学ぶことによって強弱・優劣というこれまでの価値観を越える価値観、文化が見いだされるかもしれない、と述べた。

次いで挨拶に立った小平敦・生存科学研究所専務理事は、3年来の別府市と生存科学研究所との共同研究の経過を述べ、その結論の一つが「子ども」であることを披露し、さらに生存科学の思想とその基盤となる武見太郎博士の思索の経緯を紹介した。

* * *

基調講演はノーベル文学賞受賞者・大江健三郎氏の「子どもこそ未来」で、その概要は以下の通り。

自分はフランス文学者になろうという夢を持っていたが大学に残らず小説家になったので、子どもが出来たらフランス語を教えてその夢を叶えようと思っていた。これも「子どもは未来」の一つのあり方ではある。だから子どもが知的障害を持って生まれて来た時、自分の未来はなくなって

しまったと思った。しかし、その子どもと一緒に生きていくことを決心し、子どもと暮らしていくうちに次第に自分の「未来」の捕らえ方が違ってきた。子どもに自分の未来を託すという考えが間違っていることに気づいて来た。

子どもが鳥の声や音楽に興味強いことを知って、家族全体で音楽を聴いて子ども中心に生きていこう、子どものために自分の夢をあきらめようと考えたが、それも間違いと分かってきた。

自分は私小説ではなく日本に無かったような小説を書きたかったが、この子どもと一緒に生きていくには、それがどういう意味かを自分で理解しなければならない。そのためにそれを小説に書き続けた。その過程で、子ども自身が少しずつ未来を切り開いていくことを発見した。子どもが自分で自分の未来を作り出し、私達家庭全体の未来を作り出している。私の文学も、子どものことを書くことを通じて世界を広げることができた。子どもの体の中に未来があって、それが私達をも新しく生かしてくれている。

私は、文学で世界全体に通じる言葉を作りたいと考えている。それは“折り”である。どんな折りかといえば、21世紀になって知的障害を持った人がおびえないで暮らせる社会であるように、ということである。

この世界は、地球は、自分たちだけのものではない。自分たちに貸し与えられたものである。これを破壊することなく、できるならいくらかでも改良して次の世代に譲り渡していく。これが私達が生きていく基本方針であろう。未来を考えるとこういうことではなからうか。「未来の社会をどうするか」と考えると問題がはやけてしまう。「未来」を考えると、自分の子どもが、どのよ

うな社会で生きていくことができるか、どういう家庭を作り出すことができるか、どういう国家、どういう世界が待っているか、ということを考えれば具体的に考えることができる。こうして未来を見定めるのが一番健全で正しい態度であろう。

「子どもは未来である」という考え方は、根本的な原理を示す考えであると同時に、非常に具体的な原理でもある。

* * *

引き続きパネルディスカッションが以下のメンバーで行われた。

コーディネーター：国立小児病院院長

(生存研副理事長) 小林 登氏

同：別府市医師会会長

伊東 孝廣氏

パネリスト：白百合女子大学教授 東 洋氏

同：慶應義塾大学教授 石井 威望氏

同：国立療養所西別府病院院長 黒川 徹氏

同：マザーリング研究所所長

たけなが かずこ氏

パネルの冒頭、小林氏は、大人がいろいろ子どものことを考えているが、今まで同じ場でディスカッションすることは少なかった。そこで、「子ども学」という言葉で、いろいろな専門、いろいろな立場の人達が一緒に、共通の言葉で話し合える場を作ったと、このパネルの意義を紹介。

伊東氏は、こういう課題に対して住民・専門家・行政が一緒になって共通の認識、共通の理念で話し合い、地域全体でネットワークとして取り組むことと、それをコーディネートする役割の必要性を強調した。

東氏は、日米での子どものしつけに対する目標の違いを披露しながら、これからは子どもの考え

を尊重しながら、選択力、責任を取れる自律性、人と共生できる優しさを身につけさせていくことの必要を述べた。

石井氏は、子どもには小さくても大人と同じ機能が圧縮されており、さらに既存の知識やしがらみから自由で、本当の意味の未来を作り出す力がそこにあるとした。

黒川氏は、子どもと一緒にガス室に行ったユダヤ人の小児科医、童話作家コルチャック先生の話を紹介、子どもに誇りと尊厳を持たせることの必要を指摘し、子どもは理屈抜きの愛情で成人後の社会で健全な精神を持つことができ、大人は子供を大切にす精神を持つことで自分も健全な精神をもてると説いた。

たけなが氏は、優しい子どもに育てるためには、母親が子どもを安心させることが必要で、それには、結婚・育児で独身時代とのギャップに悩む母親が、落ち着いて幸せに暮らせる社会を作る必要があり、父親の協力と社会的な連係が大切であると述べた。

最後に小林氏は、子どもには遺伝子によって育つ力がプログラムされている、それがうまく働くようにスイッチを入れるのが我々の役割であり、特に「家庭の育てる力」、母親の優しさであるが、同時に、家庭と社会とそれを結ぶ保育園、学校、病院などを含めて、それをうまくやれる社会を作り「社会の育てる力」を高めることが必要である、これは小児生態学として学問的にも研究し、実現していくことが大切であると結んだ。

パネルの間、基調講演の演者大江氏がコメンテーターとして終始参加し、毎回質問に解答を行った。氏は、ノーベル賞受賞に際して訪れたスウェーデンが、障害を持った子どもの尊厳を非常

に大切にしてくれたが、それはスウェーデンのような小さな国の誇りと尊厳によるもので、日本も大国の誇りではなく、小さな国の誇りをもって世界に貢献できれば一番良いことであると強調した。

第17回「東西の健康観・医・薬」研究会 治験は人倫に合うか？

1月27日（金）午後2時より、東京慈恵会医科大学講師・影山茂氏と、東京女子医科大学名誉教授・廣澤弘七郎氏により報告がなされた。

影山氏は、「治験の意義と啓蒙」と題され、動物との種差、健常者と病人とのちがいが、心理的な因子などによる、治験の必要性をまず述べた後、日本で治験参加に消極的な理由として、「新薬は外国で開発されたもの」という外国への依存の歴史、volunteer spirit の乏しさ、「説明と同意」の不足を挙げられた。医師も頼まれ仕事といった意識が強く治験の意義を正しく理解していない。インフォームド・コンセントの励行、医療従事者・製薬企業関係者がむしろ率先して治験に参加するなど医療サイドの改善とともに、laymen への啓蒙が重要であるとされ、治験の正しい理解と、日本での治験が国際貢献にもなり、いわば noblesse oblige としての volunteer spirit の涵養が重要であるとされた。

廣澤氏は、「治験の道義的問題点」と題され、昭和20年代からの日本の治験の状況を循環器医としての自身の体験から具体的に紹介された。患者にプラセボを投与することは素朴に人道に反すると考えられる。二重盲験法を用いた試験は自分の考えで一時期断っていたが、医局員が臨床薬理学

の進展に接触する機会を逸することになるので節を屈して引き受けていた。一般人の心理をよく知れば本来のインフォームド・コンセントが得られているかどうかは大いに疑わしい。治験の数が多すぎることも問題である。パターンリズムが批判されるが、「先生を頼りにして気がついたら天国にいた」というのも一つの理想的医師患者関係であるとされた。

一般人に対する情報提供、米国の医療体制における治験の実態、臓器移植の倫理的問題との関係など多くの議論がなされた。

平成6年度第5回常務理事会

平成7年1月10日(火)午後3時より、研究所会議室において平成6年度第5回常務理事会が開催され、平成6年11月・12月の研究活動の報告の後、基本的な研究所の方針と実践、経理、雑誌『生存科学』の編集と配布、会員制度のあり方等につき協議が行われた。

さらにこれを受け、2月14日(火)午前10時より行われた常務理事打ち合わせ会において、その細部にわたり、また実務推進について協議が行われ、来年度(4月)より以下のような改革が行われることになった。

★雑誌『生存科学』については

AタイプとBタイプの2種類を毎年発行する。体裁は両方とも従来と同じとする。

Aタイプは、生存科学としての立場からの主張、提言など、基本的、総合的問題を、対談、座談会、会員のコミュニケーション、意見発表などを含めて、一般的に、なるべく平易に(論述的

に)紹介し、社会的な問題提起を行うことに重点を置く。発行は年2回以上を目標とするが、当面は1回で、第1回は平成7年6月を予定する。

Bタイプは、生存科学と関わりある学術的、科学的、専門的論文、資料、データなどの発表に重点を置く。発行は年1回で、平成7年12月を予定する。

なお以上にもとない雑誌のみの購読希望の際は、当面 Aタイプ一冊1500円

Bタイプ一冊3000円とする。

また、従来の図書館等への無料配布は中止し、今後原則的に有料とする。

研究会日誌

1月16日(月) バイオサナトロジー学会

第8回公開研究会

「きらめきフォーラム」

1月19日(木) 鹿児島プロジェクト研究準備会

1月23日(月) 21世紀の産業活動のありかた研究会

1月27日(金) 別府市総合調査研究会

2月20日(月) 別府市総合調査研究会

2月22日(水) 鹿児島プロジェクト研究準備会

